

# 木村定三コレクション「硯」調査報告目録

(作品解説)

澄心堂 北 畠 五 鼎

鶴見大学 小 池 富 雄

元愛知県陶磁美術館 仲 野 泰 裕

沖縄県立芸術大学 森 達 也

ほか (p. 48凡例参照)

## 中国の硯



### 1 風字硯 (玉)

宋時代 11-12世紀

新疆省産緑玉 (軟玉・ネフライト)

縦10.9 横7.5 高1.1

M2281

硯の素材からみると玉を用いた硯、つまり玉硯がもっとも古い。文献上では中国古代の帝王黄帝の玉硯というのがいちばん古いことになっている。この風字硯は出土品と思われ、硯面全体に黄赤色の土錆が付着している。硯身は青緑を帯びた材で、制式はいわゆる晋唐式の風字硯に作っている。浅いけれど墨池が作られていることから、宋代以降の玉硯と思われる。がんらい玉硯は朱をするのに適しており、この風字硯も玄墨をすった形跡はない。(北畠)

桐箱底裏面 白文方印「山川」

風呂敷に木村定三が「唐/玉製 風字硯」と墨書きする。(編者)



## 2 蝉硯（玉）

宋時代 11-12世紀

玉（軟玉・ネフライト）

縦11.6 横8.5 高1.7

M2363

蝉様の玉硯は白玉、青玉を用いたものが多いが、大半は宋代以後に製作されている。この玉硯は朱をすった形跡がみられる。玉は石理が細かいため墨はうわすべりしておりにくい、朱はかえってよくおりる。蝉の口の部分が墨池となっており、内に朱がのこっている。中国では古い時代より素材の違いにより身分の上下を区別する制度があった。印章に例をとれば皇帝は玉印、諸王は金印、諸子は銅印とされていた。硯も皇帝は玉硯と定められていた。（北畠）

紫檀共箱に納められる。

紫檀箱蓋表貼紙に「楽浪出土 蝉硯」と木村定三が墨書きする。朱文橢円印「淡如水」（木村定三所用）

紫檀箱蓋裏貼紙：白文方印「山川」

風呂敷に木村定三が「楽浪出土/玉製 蝉硯」と墨書きする。（編者）



### 3 蓬莱硯 (緑端)

北宋時代 11世紀  
 広東省緑端溪石 (凝灰岩)  
 縦13.2 横7.9 高3.9  
 M2347

蓬莱は東方の海上にあった仙閣といわれ、仙人が住むとされる。多分に道家の思想 (不老長生) が反映している。蓬莱硯は宋代の端溪石を用いたものに多く見られ、紫色系のものと緑色系のものが伝わっている。図案からみると、硯面に海中に浮かぶ蓬莱山と楼閣、側面に十八羅漢と海中竜魚を毛彫りし、背陰は深く彫りこんで神亀が碑を背負っているすがたを丸彫りしている。石は宋代に採取された端溪の緑石、いわゆる緑端石が用いられている。(北畠)

硯裏面：印刻「\*菴\*」

紫檀共箱と桐外箱に納められる。

桐箱蓋表：「蓬莱」墨書

蓋裏：「對雲窟」墨書、朱文方印「對雲窟」(その下に墨書と朱印を消した痕跡あり)

箱側面貼紙：「一壺二」墨書

蓋覆 (渋柿引)：「蓬莱」墨書

蓋覆側面：「蓬莱」墨書

包紙：「銘蓬莱/御靈前送葬研/\* 梧閣居士/林光院」墨書、水引 (総白色) が附属する。

「對雲窟」は橋本独山の号。林光院は相国寺の西の塔頭。明治7 (1874) 年に廃院となるが、大正8 (1919) 年、相国寺派管長・橋本獨山により再興され、独山は再中興和尚とされている。

橋本独山

明治2 (1869) 年 - 昭和13 (1938) 臨濟宗。橋本峨山の法をつぐ。師の没後、京都の鹿王院をつぎ、橋本姓を名のる。明治44 (1911) 年相国寺住職、相国寺派管長。法名は玄義。別号に對雲窟、南苑窟。

木村美保子夫人によれば、定三氏は生前、「独山は良いものを持っている」と語っていたそうである。(編者)



#### 4 びんぼん 硯板 (緑端)

南宋時代 12世紀  
広東省緑端溪石 (凝灰岩)  
縦20.0 横11.3 高5.6  
M2348

端溪石は紫色が基本だが、ときに緑色、白色、黒色の材が産出している。これを緑端、白端、黒端などといっている。この硯板は緑端が用いられており、作りの巧さからみて南宋の製と考えられる。

硯板という様式は、宋の「端溪硯譜」に出てくるが、もっとも原初的な形式である。この硯板のように硯面から下方にわずかにすぼめてあるのが伝統手法である。 (北畠)

中国式布張り厚紙箱に納められる。

附属品1：図録「第2回文房至宝と書画 展示即売会」(丸栄スカイル)

附属品2：名刺「株式会社手塚筆舗 日比雅弥」(「3年 8/22丸栄」木村定三書き込み有)

風呂敷に木村定三が「明代/緑石硯板」と墨書きする。 (編者)



#### 5 ぎよけん 魚硯

宋時代 11-12世紀  
広東省端溪石 (山岩)  
縦18.0 横9.2 高2.4  
M2350

全体に黄土が付着しているので出土硯とも思われるが、細部の刻を見ると硯工の作ではあるまい。中国では魚を意匠した硯の九割が鯉魚である。石種から見ると端溪の山坑の石と思われるが、そうすると時代は唐宋以降の硯ということになる。背陰に足が施されているが、正面に墨堂とそれに連なる墨池が作られているので、宋代ごろ作られた硯とみたほうがよいだろう。 (北畠)

風呂敷：「六朝魚形硯」と木村定三が墨書する。

(編者)



## 6 壺様硯こようけん（青石）

元時代 13-14世紀

青石

縦22.5 横14.7 高4.7

M2360

箱書に「青石」とあるが、青石のことは米芾の硯史に述べたものをもっとも古い。それによると、「色は歙石に類するが、理はみな及ばない。発墨して退鋒しない」と書かれている。特徴は似ているのであるいは青石かもしれない。米芾のいっている青石は山東省に産した石のことだが、多くは碑石のことである。

硯式は壺様だが、三代の古銅器を摹したものと考えられる。背陰は壺形に掘りさげ、篆書で「口林李長春」と刻されている。（北畠）

硯蓋付属。

包裂（絹・内側）：「青端溪壺形饜髣硯石/蓋付」

包裂（綿絹裕・外側）：「青石壺形耳付御硯石＊」

桐箱に納められる

桐箱蓋表：「青石壺形＊硯石/へ拾＊/式拾式番」  
墨書

桐箱蓋裏：「尾張徳川家伝来」墨書

桐箱蓋裏貼紙：「二〇二」墨書、花文印、「＊號」  
墨書

桐箱側面貼紙：「四一一」墨書、朱文方印「聚楽會」

風呂敷に木村定三が「尾張徳川家伝来/壺形硯」と墨書きする。（編者）



## 7 日月硯 (端溪)

明時代 15-16世紀

広東省端溪石 (明抗水岩石・凝灰岩)

縦16.0 横11.8 高2.5

M2353

端溪石を論じた評の中で水岩という言葉がもっともやかましく、水岩の中で子石という言葉がとりわけやかましく論じられている。たとえば「ことさら子石と呼べるものなど無い」とか、逆に「水岩はみな子石で、子石でないものはない」とか、この二論に分かれる。

子石は一名卵石とも呼ばれたように、全体の形状が卵形を呈しているというイメージが漠然とある。この硯も子石卵石に属し、大小の活眼(かつかん)を日月に見たてて作硯している。(北畠)

瓜瓞を彫した紫檀共箱と桐外箱に納められる。

桐箱蓋表：「争光硯」墨書

桐箱蓋裏：「對雲蔵」墨書 朱文円印「對」

硯袋底面：「朱文方印「對雲閣主」

風呂敷に木村定三が「争光硯」と墨書きする。

(編者)

### 7-2 紫檀箱

清時代 19-20世紀

紫檀材を楕円の瓜型の姿に彫り、合口造の構造として内部は黒漆塗り。蓋と身の表の細部には、瓜の実、蔓、葉およびテントウムシの類の円形昆虫とカミキリムシのような細長い昆虫などを薄肉の立体的な彫刻であらわす。(小池)



## 8 瓦硯

明時代 15-16世紀

陶器

縦22.0 横(最長) 15.0 高3.8

M2359

表面に叩き目の残る平瓦の表面に掘り込みを入れて作った硯。古瓦を加工した硯は、古来、中国や日本の文人が愛好した。本硯の箱書きには「阿房宮瓦硯」とあるが、この瓦が秦・始皇帝の建造した阿房宮の瓦であるかどうかは定かでない。

(森)

紫檀硯蓋付属。更紗硯袋と桐箱に納められる。

桐箱表：「阿房宮瓦硯/悦山\*\*瓦/硯銘/\*\*題

風呂敷に木村定三が「阿房宮瓦硯/悦山禪師/詩幅添」と墨書きする。

えっさんどうしゅう  
悦山道宗

明の僧。1629(崇禎2)年8月22日生まれ。黄檗宗。1657(明暦3)年来日。木庵性瑫、隠元隆琦に師事。のち性瑫の法をつぎ、宝永2年山城(京都府)万福寺住持となる。能書家として知られた。1709(宝永6)年7月29日死去、81歳。福建省出身。語録に「悦山禪師語録」など。

あほうきゅう  
阿房宮

秦の始皇帝が建てた宮殿。陝西省西安に遺跡が残る。

(編者)



## 9 鯉魚硯 (青磁人物文硯)

明時代 17世紀

龍泉窯系

縦13.0 横8.3 総高5.7 身高3.4

M2345

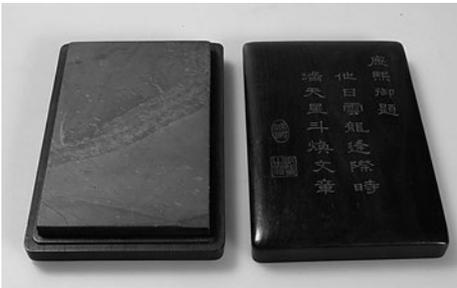
墨溜りに鯉形の貼花文が施された青磁製の硯。蓋の表面には人物文が彫られている。釉はやや緑がかり、発色は淡い。茶の湯の世界で「七官青磁」と呼ばれる中国・明時代後期の青磁である。七官青磁は龍泉窯の製品とされることもあるが、龍泉窯青磁の輸出は16世紀初頭頃から衰退しており、こうした明時代末期の青磁の茶道具や文房具は龍泉窯青磁ではなく、景德鎮窯で古染付などとともに日本からの注文によって作られた製品である可能性が高い。(森)

絹間道硯袋と桐箱に納められる。

桐箱蓋表：「青磁人形紋/硯/京」墨書

桐箱側面貼紙：「青磁硯」

風呂敷に木村定三が「人形文青磁硯」と墨書きする。(編者)



## 10 康熙御題硯

清時代 17-18世紀

安徽省歙州石(粘板岩)

縦22.5 横14.8 高4.3

M2352

匣蓋に康熙帝の御題が刻されており、皇帝の愛玩硯だったことが分かる。康熙帝は学問好きで知られ、血を吐くまで読書したと伝えられる。董其昌の書を好み、松花江緑石硯を世に出したことで知られる。

全体を長方硯板に作り、縦22.5cmと比較的大きな歙州石を用いてある。硯面に金星紋が散在しており、旧坑再開発の佳石が使われたと考えられる。(北畠)

紫檀共箱に納められる。現在、箱から硯を出す事はできない。

共箱箱表：「康熙御題/他日雲龍逢際時/滿天星斗煥文章」印刻、印刻椿円印「\*\*/御題」、印刻方印「御覽/\*\*」(編者)



## 11 四直硯

清時代 17-18世紀  
 山東省紅糸石（石灰岩）  
 縦12.0 横8.1 高4.1  
 M2365

青州の紅糸石硯は唐の柳公権が天下第一と称したというので、戦前はやかましく論じられていた。けれどもこれは文献の読み違いであって、正しくは「青州の石末硯」を云ったものである。

紅糸硯のことを初めて取りあげたのは北宋の唐詢であり、以後、歐陽脩、蔡襄、米芾などが言及している。この四直硯は墨池の作りからみて清代の製と思われ、石は紅地に黄糸の現れた材が用いられている。 (北畠)

紫檀共箱に納められる。箱書きなし。 (編者)



## 12 雲月硯

清時代 17-18世紀  
 広東省端溪石（水岩石・凝灰岩）  
 縦9.9 横1.3 高1.3(木蓋付1.9)  
 M2366

端溪石に現れた眼を鳥や動物の目に意匠した硯はよく見られるが、次いで天文に擬したものが多。この硯も数顆の眼があり、墨池の上に現れた眼を月に見たて、周辺に雲紋を刻して雲月としている。材は端溪水石の石で、天然形をそのまま活かして、墨池を偃月形に彫っている。眼の色彩からみて、清初に採取された石と思われる。硯式も五星を意識した作かも知れない。 (北畠)

紫檀硯蓋が付属する。硯袋と桐箱に納められる。

桐箱落とし蓋表：「\*眼硯」

桐箱落とし蓋裏：「癸巳春/\*\*\*/\*\*/ \*\*人」

(編者)



### 13 円面硯 えんめんげん

清時代か 17-18世紀か

安徽省 りょくきゅうしゅう 歙州

径11.1 高4.0

M2358

この硯式は日本に古く伝わる石硯に元がある。つまり、京都北野神社に伝わる「残月硯」と呼ばれているものがそれである。全体を円形に作り、上部に月形の墨池を彫り、左縁辺に残月の二字を隷書で刻してある。江戸以前より知名な硯だったので、何点か模作されたようで、この硯もその一点なのかも知れない。石からみると、墨堂に金星が現れているので歙州石のようである。そうすると中国製と見ることもできる。 (北畠)

硯袋と桐箱に納められる。

桐箱表：「\*雲石硯」墨書

桐箱蓋裏：「最\*\*\*庵/常住/\*哉\*」墨書、朱文円印「\*」、花押「\*」

桐箱側面貼紙：「番号四十八号/画題\*雲石硯円形」墨書

風呂敷に木村定三が「天平時代/出雲石/円硯」と墨書きする。 (編者)



#### 14 張良橋下捧履回図硯

宋時代以後  
（びんぎんがい）  
 広東省懸崖石  
 縦19.9 横13.5 高4.2  
 M2361

歴史の逸話を図案化した硯に晋の王羲之の蘭亭硯が有名だが、この硯のように漢の高祖の参謀張良の故事を図案化した硯は、筆者の管見、あまり知らない。石質から見ると、端溪にしては紫気が足りないように思われる。むしろ紫黒色にちかい石で、端溪の山岩か他県の石かも知れない。中央に墨池と墨堂が作られているところからみると、宋代以後の製作と考えられる。（北畠）

本体ラベル：「NO 006715」スタンプ

桐箱に納められる。

桐箱蓋表：「大明進履橋\*物硯」墨書

蓋覆：「端溪進履橋刻名硯/竹雨\*\*」墨書、白文方印「\*\*」、朱文方印「竹雨」

風呂敷：「端溪硯/張良橋下捧履図」木村定三墨書する。（編者）



#### 15 楢円小硯（未完）

不明  
 未特定  
 縦7.6 横5.5 高3.6  
 M2364

この硯は未完成、つまり彫りかけと思われる。中国は外敵の侵攻や内乱が各時代にあったから、彫りかけの硯がときに見られる。石は緑色系の凝灰岩と思われるので、端溪の緑石と考えてよい。小さい硯なので蓬萊様式に仕上げようとしたわけではあるまいが、楢円形に石作りしたところにヒントがある。作硯者には完成品が描かれていたのだろうが、いまは想像するしか手立てがない。

（北畠）

紫檀硯台・紫檀硯蓋が付属する。

桐箱に納められる。

桐箱蓋表：「漢出土 楢円小硯」

桐箱側面：「H\*\*」「\*」シール様のもの2枚。

風呂敷に木村定三が「漢 楢円硯」と墨書きする。

（編者）

## 朝鮮半島の硯



### 16 梅月硯

朝鮮時代中期 17-18世紀  
慈江道渭原石

縦24.3 横13.3 高1.4

M2344

渭原石は朝鮮の硯石の中でいちばん有名なものである。梅月硯はこの渭原石を用いた作硯である。世に出たのは今から約三百年ぐらい前である。渭原は鴨緑江の支流で、その岸壁より剥し取ったのが渭原石である。材は粘板岩で、暗紫色の層と淡緑色の層から成っている。この層を巧く利用し、墨池の上に梅枝と月を刻している。又、墨堂を竹節に見立て左右に竹葉を配している。（北畠）

更紗綿入硯布袋に納められる。

風呂敷に木村定三が「月兔梅竹/高麗緑石/硯」と墨書きする。

### 紫地鳳凰牡丹入変菱模様緞子硯袋

表地：18-19世紀

裏地：現代

（編者）



17 <sup>かてつけん</sup> 瓜殿硯 (白磁瓜形硯)

朝鮮時代 18-19世紀

磁器

縦20.1 横15.0 高13.2

M2351

19世紀には<sup>ギンバ</sup>両班と呼ばれる士族層の拡大により、そのステイタス・シンボルであった水滴・筆筒・紙筒など文房具が多々作られた。いずれも動植物や家屋などを象った愛らしいものが多く、韓国陶磁の特色のひとつもなっている。本品は瓜を象り、身を割ると硯面が現れるユニークなアイデアを形としている。蓋は轆轤成形、身は内部に型をあてて成形した後、粗く削って整えている。蓋と身を合わせて焼成し、接着部には耐火土を塗る。瓜の稜ひとつひとつを肉厚に削りだし、どっしりとしたマクワ瓜の充実感をよく表わして豊穡である。類品が京都・高麗美術館に伝わる。

(片山まび 2011年発行『朝鮮陶磁』より再録)

無地桐箱に納められる。

風呂敷に木村定三が「李朝/白磁瓜形/硯」と墨書きする。 (編者)



## 18 葡萄栗鼠硯

朝鮮時代後期 19世紀

チヤガントイげん  
慈江道渭原石

縦13.8 横8.1 高3.1

M2367

朝鮮の渭原石は一名渭原端溪と呼ばれていた。色は紫というより茶紫にちかい。これを紫金石といい、端溪石のように青花紋は出ない。ときに緑点や白点が出るだけである。この硯にも墨堂に白点が散在している。墨池の上部に葡萄栗鼠が、下辺両角に蝙蝠が彫られている。彫琢のかたさからみて、李朝後期の作硯と考えられる。(北畠)

包紙(薄様)に木村定三が「李朝硯/葡萄と栗鼠」と墨書きする。(編者)



## 19 花中君子硯

朝鮮時代後期 19-20世紀

チユンチヨンナムドらんぼ  
忠清南道藍浦石

縦15.2 横9.5 高2.0

M2368

骨董店で見かける李朝硯と称するものは、多く韓国産の藍浦石のようである。色は灰黒色で、日本の硯石、たとえば雨端石などに似ている。花中君子は蓮の花をたとえた成語であり、清代の端溪硯に様式化されたものを見る。全体を荷葉に作り、墨池の中に蟹、つまり君子を彫った硯をいう。一名、君子硯ともいう。この硯は全体を角丸の長方に作り、墨池の中央に蟹を彫り、左右に蓮荷を彫っている。(北畠)

硯裏面刻印:「禮\*\*甲」、その他に判読不能な漢字が複数多重に線刻される。

厚紙の包に木村定三が「李朝 蛙 蓮 黒石硯」と墨書きする。(編者)



## 20 はちりょうげん 八稜硯

大正4 (1914) 年  
ハムギョングフクトシヨウシヨウ  
咸鏡北道鐘城石 (粘板岩)  
縦32.1 横27.5 高2.4  
M2841

この硯は朝鮮の鐘城石で、八稜硯板とも呼ば  
る形式である。伝統からいうと、長方硯板に準  
じた硯とみてよい。鐘城石は豆満江右岸鐘城の山  
中より採掘されたが、年代は李朝晩期である。色  
は灰青黒、質は粘板岩で堅硬である。特徴のある  
斑紋はなく、下墨は滑沢気味である。硯面に黄土  
が付着しているので、いちど土中したのかもしれ  
ない。三十年くらい前、鐘城硯の新作が日本に入っ  
てきていたが、蓋付の形式が多かった。

(北畠)

木箱に納められる。

箱蓋表：「大正四年/於朝鮮鐘城得/古代硯 /玉\*  
代」墨書

箱蓋表貼紙：「No003445」スタンプ

箱側面貼紙：「硯/甲六八三」墨書

大正4 (1914) 年、鐘城は日本の統治下におり、  
咸鏡北道知事は、桑原八司 (1913年11月から1918  
年9月まで)。日本統治時代、ソ連・満洲に近い  
国境地帯のこの道は軍事上の要衝であり、羅南に  
陸軍の師団が置かれていた。日本から中国大陸へ  
の進出の拠点。1930年代に日本と満洲を最短距離  
で結ぶ地域として着目され、羅津の築港などの開  
発が行われた。

(編者)

## 日本の硯



### 21 風字硯

平安時代末期～鎌倉時代 12-13世紀

木屑 漆塗 蒔絵

縦16.5 横13.0 高さ5.3

M2357

風字式の硯は中国六朝から唐代にかけて流行ったかたちだが、日本でも奈良平安を通して作られた。素材としては石材は少なく、陶磁器及び漆工品が多い。漆工品は木屑で胎を作り、表面を金漆で仕上げた風字硯が見られる。日本ではこれを猿面硯などと呼んでいる。この風字硯も手取りの軽さからみて木屑を用いたものと思われ、側面に雷紋が金蒔絵されている。(北畠)

桐箱に納められる。

桐箱蓋表貼紙：「風字硯」墨書、朱文円印「定」  
風呂敷に木村定三が「藤原/風字硯」と墨書きする。

(編者)



## 22 灰釉長方硯

江戸時代 17世紀末-18世紀初頭（美濃窯）

陶器

縦19.8 横15.0 高3.9

M2354

やや縦長の板状陶製硯であり、石製硯に劣らぬ安定感がある。背面を深くえぐり取って、墨を貯める部分を裏から貼り付けて袋状の墨池を成形しており、石製硯と大きく異なる点である。表面は型成形と考えられる。墨池と墨堂はほぼ1対3ほどに区画されており、墨池の上面は格狭間風であり、すった墨が墨池へ流れ落ちる落潮は細く絞り込まれている。全体が堆線状の陽刻文で縁取りされており、墨池・墨堂各部の四方には蔓状の文様が認められる。背面を除く全面に長石を多めに含むやや白濁気味の灰釉が掛けられているが、墨堂は、釉薬が薄く均一に掛けられている。釉調、胎土などから、17世紀末から18世紀初頭に美濃窯で焼かれたものと考えられる。（仲野）

桐箱に納められる。

蓋表貼紙：「花背経塚出土 陶硯」木村定三墨書朱文円印

風呂敷に木村定三が「鎌倉時代/大和花背経塚出土/陶硯」と墨書きする。（編者）



## 23 鉄釉文字彫文陶硯

江戸時代 18世紀

陶器

縦19.7 横16.7 高2.2

M2343

方形の本体の中央に径8cmほどの円形の掘り込みを設け墨池と墨堂を形成しており、全体に薄く鉄釉が掛けられている。右脇縦に「妙法」、円面上方に「秋」、同左やや上に「月」、同右下に「瀧」の文字が配置されている。文字は、緻密な胎土に行書体を思わす軽やかな筆致で深く彫り込まれている。また、鋭く彫り込まれた円面は、満月にも、さらに相半ばする墨堂と墨池を画するなだらかな落潮のラインにより、上弦とも下弦の月ともみえる、趣のある取り合わせとなっている。（仲野）

無地桐箱に納められる

風呂敷に木村定三が「古丹波/陶硯/文字彫」と墨書きする。

彫りこまれた「妙法」の文字は、京都五山送り火のうち、松ヶ崎西山・東山の「妙法」か。この送り火が行われる十六夜、もしくは前日の十五夜が満月となる。（編者）



## 24 石渠硯

江戸時代末～明治時代 19世紀

宮城県雄勝(玄昌)石

縦19.0 横15.9 高3.1(蓋付3.5)

M2362

石渠硯は唐代の澄泥硯に作例を見るが、宋代以降に端溪硯や歙州硯にも採り入れられている。井田硯に似ているが、四すみ井桁に組まれていないので区別できる。雄勝石は仙台藩の御留石に指定されていたこともあるが、スレート材で柔かく彫りやすい。したがって中国の硯に真似た硯が作られた。色は灰青黒を呈し、これとって特徴のある石紋は出ない。ときおり色漆を用いて人為的に眼を描いた硯がある。(北畠)

共箱と共箱袋が桐外箱に納められる。

共箱蓋表：「石斎宝研」金泥書

共箱蓋裏：金文方印「南苑禪窟」(硯袋底内側に同じ)

共箱底内側：朱文方印「南苑禪窟」、白文長方印「對雲」

桐箱蓋表：「黄氏\*\*\*\*谿墨石\*」墨書

桐箱蓋側面貼紙：「黄氏」墨書、「九九」墨書

桐箱蓋裏：「南苑禪窟」墨書、朱文方印「南苑禪窟」、白文長方印「對雲」

風呂敷に木村定三が「黄氏/黒端溪/独山愛蔵」と墨書きする。(編者)



## 25-1 長方硯 ちようほうげん

江戸時代末～明治時代初期 19世紀

山梨県雨畑石 あまはた

縦21.1 横11.7 高2.5

M2370-3

甲斐の雨畑石、一に雨端石はそうとう古い時代より知られていたようだが、はっきりした発見年代は分からない。雨畑川上流の山谷から採掘された石に蒼黒、浅緑、淡紫の三種があり、その内、蒼黒の石がもっとも多く採掘されている。石はやや堅密にすぎ、唐墨より和墨が合う。作硯は中国風の長方式で、ゆったりした墨池と墨堂を作っている。背面は平坦に作り、そこに淡い金暈が現れている。地元作硯家として雨宮静軒せいけんが知られている。(北畠)

高蒔絵硯箱と木外箱に納められる。水滴添う。

硯箱蓋表：「三輪の山」

硯箱側面貼紙：「No.006462」

外箱蓋表：墨書あるも判読できず。

箱側面：「\*\*」墨書「光悦三輪山丸形大硯」貼紙

箱側面貼紙：「光悦三輪山 丸形 大硯」

(編者)



## 25-2 水滴

陶器

縦4.1 横8.8 高2.2

M2370-2

楽焼の長方形。藍色の釉薬をかけて、底部は無釉の黄土色を呈している。(小池)



### 25-3 三輪山蒔絵硯箱

昭和時代初期 20世紀

黒漆 金蒔絵 鉛象眼 蝶鈕

径37.0 総高34.5 縁高4.8

M2370-1

大型の円形硯箱で、蓋表は半球状に盛り上がっている。琳派蒔絵の蓋表が盛り上げた意匠にならうが、極めて大型であり、木地の巧みな造形がうかがわれる。側面は曲げ、身の底部は数枚の柾目材をはぎ合せて、狂いはない。内外の総体は、黒漆塗。蓋の表から側面にかけて厚い鉛板の板を曲面に貼り付けて、三輪山と杉木立をあらわし、遠景の山は金蒔絵で表現している。空には、鉛板の満月を貼り、金蒔絵で「三輪」、山の上には金蒔絵の「農山」の文字をあらわす。杉木立には、鮑とみられる厚貝で幹をあらわす。

蓋の裏には、風になびく薄の葉を鉛板、厚貝、金蒔絵であらわす。身の見込みには、井桁状の枠の下水板に兩畑石の長方硯を納める。奈良の三輪山は全山が御神体とされ、杉や松の巨木も同様に、神が宿るとされる。万葉集はじめ数々の和歌に歌われている。例えば「ながむれば吹く風すずし三輪の山杉の梢を出ずる月影」（順徳院）の古歌からは、蓋表の月、杉木立、蓋裏から風にそよぐ草を想起させる。

収納の箱は大型の杉被箱で側面の貼紙に「光悦三輪山 丸形 大硯」とあるが、本阿弥光悦の琳派の技法を写した近代の模古作である。

(小池)



## 26-1 葫蘆硯

江戸時代末 19世紀

山梨県雨畑石もしくは玄呂石 漆 金蒔絵

縦12.6 横10.7 高1.8

M2369-3

この硯は光悦下絵の硯箱に納められているが、石は雄勝石と思われる。牡鹿半島の海岸より採石された灰青黒色の粘板岩で、軟石と硬石の二種がある。明治のころは全国産硯の八割を占めた時期もあり、碑材やスレートとして各地に供給された。硯は全体を葫蘆形に作り、縁辺に金蒔絵が施されている。日本では端溪石のような名石が産出しなかったために、硯箱の製作が盛んに行われたと考えられる。(北畠)

蒔絵硯箱と桐外箱に納められる。水滴添う。

桐箱蓋表：「光悦/硯箱 蒔絵なつばき」墨書

桐箱側面貼紙：「光悦硯箱」墨書

付属入札：「第弐六六号 金六万〇五百円也/光悦  
椿蒔絵 硯箱 信文家伝来/宇治久/石黒/植仲」  
「名古屋美術倶楽部」朱文方印「\*」

風呂敷に木村定三が「光悦蒔絵 鈍椿硯箱」と墨書きする。(編者)

## 26-2 水滴

縦5.7 横5.4 高1.5

M2369-2

銅製の円形に雨龍を浮き彫りにかたどった古様な意匠で、水滴の表面にも巧みに暗緑色・暗褐色の古色が施されている。硯石とともに硯箱の底板を彫りくぼめて納められている。(小池)





なた つばきききうらでんすずりばこ  
26-3 鉦に椿時絵螺鈿硯箱

江戸時代末～明治 19世紀  
黒漆 金時絵 鉛象眼 螺鈿  
縦28.1 横22.2 高4.6  
M2369-1

蓋の表には、琳派の意匠にもとづく鉦に椿の花の大柄な図をあらわして、鉦の刃には厚い鉛板を貼付けている。厚い鉛板を大胆に貼り蒔絵と組み合わせるのは、桃山時代以降の本阿弥光悦を祖とする琳派の蒔絵の代表的な技法である。椿の葉の1枚には、厚い夜光貝とみられる貝を割って貼っている。鉦の柄と、椿の花弁は金の高蒔絵で表現されて、しかも全体に磨減させた古色が、意図的に加えられている。

通常の硯箱が、打被せの構造であるの比べて、二方棧蓋の四辺に面取りを大きく削いだ姿は、桃山時代の町衆好みの軽快な形式である。蓋の裏面は、朱漆塗で簡略な蝶の図が、厚い夜光貝と鉛板の線描で施されている。一部剥落した下から、朱塗の地塗が見えるので、朱漆地に文様を貼る蓋裏の装着技法は、表側とは違う細工であり、後補の可能性もある。硯箱の板材には、厚い材を用いて、古拙な印象であり、内部は朱漆塗、蓋と身の木口は、金沃懸地にしている。巧妙に磨減や古色が付けられているものの、塗りと鉛板の古色着色などからみて近代の作であろう。収納箱の杉台差造箱の蓋には「光悦 硯箱 蒔絵 なた二つばき」と墨書があるが、本阿弥光悦作ではなく光悦風の模古作である。

昭和29（1954）年2月15日の名古屋美術倶楽部の入札の落ち札1枚が附属する。「光悦椿時絵硯箱 信文家伝来」と由緒を示し、落札者の3名の骨董商はいずれも名古屋で2軒は現在も続いている。「信文家」とは、「文」の文字に少し、ゆがみがあり「友」の誤記であろう。「信友家」とは江戸時代に創業した名古屋の尾張藩御用達商人「信濃屋」近藤友右衛門を指し、綿糸商人として隆盛し明治以降の名古屋を代表する繊維企業に成長した。現在も企業として活動している。戦前戦後に、「信友」は、名古屋の茶道具・美術収集家としても著名であった。

（小池）



## 27 円硯

江戸時代末～明治時代 19世紀

愛知県鳳来寺石

縦18.8 横12.3 高3.6

M2349-3

日本では硯そのものよりも硯箱の工芸が発達した。平安時代の作例はほとんど遺っておらず、鎌倉時代から室町にかけて製作された硯箱がわずかに伝わっているだけである。だいたい金蒔絵の工芸が多く、箱の内は懸ごに作られ、そこに硯、水滴などを嵌めこんだ形態である。軍配型の硯箱はときたま見かけるが、これは桐の葉を金蒔絵で散らしている。これも硯と水滴が置かれ、硯は江戸後期の鳳来寺石と思われる。(北畠)

硯箱袋、軍配形蒔絵硯箱に納められる。水滴添う。

桐箱蓋表：「時代桐蒔絵軍配硯筥」墨書

桐箱側面貼紙：「二百\*\*\*クバ\*形/ス\*\*\*」墨書

風呂敷に木村定三が「桐蒔絵/軍配硯筥」と墨書きする。(編者)

## 25-2 萌黄地牡丹梅竹模様緞子硯袋

表地：19世紀 (経糸萌黄、緯糸)

## 25-3 蒔絵軍配硯箱

M2349-1



## 28 猿面硯

明治～昭和時代初期 19-20世紀

須恵器 黒漆金塵蒔絵

縦最長19.6 横最長11.8 高3.0

M2355

猿面硯と呼ばれる陶硯の現代の模古作で、奈良～平安時代の姿を写している。側面には黒漆を塗り、金粉をまばらに塵にまいて装飾としている。  
(小池)

俵型黒漆硯箱に納められる。風呂敷に木村定三が「鎌倉 猿面硯」と墨書きする。  
(編者)



## 29 猿面硯

昭和時代初期 20世紀

瓦 蒔絵螺鈿

縦最長13.6 横最長9.4 高3.6

M2356

平安時代の猿面硯と呼ばれる姿を模した陶硯。側面には金沃懸地に螺鈿で四菱文をめぐらしている。王朝趣味的な有職織物の菱文を襷状に配して、菱型文と半裁の三角形を上下に組み合わせた螺鈿を交互に巡らす。螺鈿に用いた貝は、中厚の夜光貝と見られ、菱文の内部を花卉形に切り抜いて4枚1組で菱型をあらわす。切り抜いた穴は、沃懸地で埋めている。

硯石の口縁には、鉛と見られる金属の覆輪を施し、周囲が打ち欠け易い硯を保護して、美しく仕立てている。低い底部の足にも金沃懸地を施し、粘土を成形した陶硯の特徴である窺目が見込みと底面に施されるものの、全体に透明な漆もかけられている。木胎黒漆塗の蓋が沿う。

(小池)

黒漆硯蓋付属。緞子硯袋と桐外箱に納められる。  
桐箱蓋表貼紙：「\*\*猿面硯」「廿一」 (編者)



### 30 天然硯

昭和時代 20世紀

長野県竜溪石

縦23.7 横9.5 高7.5

M2330-1

龍溪石は江戸後期ごろから知られていたようだが、一般に知られるようになったのは昭和に入ってからのものである。長野県天龍川の流石と考えられているので、産石地は広域にわたるが、横川付近より採取された石がもっとも良質といわれている。

作硯は、天然の流石を上下に切りひらき、下の一片に墨池を作り、上の一片を蓋にするとびたりと合う。結果、もとの天然形を見せる。（北畠）

硯底：印刻「龍溪」

水滴・筆架・文鎮各1が添う。

すべて桐箱に納められる。

桐箱蓋覆に「那智黒/自然石硯/古銅/筆架「連山」/古銅（「虎」文鎮）/附 水滴/古銅「船形」と木村定三が墨書きする。

風呂敷：「筆架/那智黒/自然硯/船水滴/添う」と木村定三が墨書きする。（編者）



### 30-2 古銅船形水滴

江戸末～明治時代 19世紀

銅鑄造

縦8.9 横3.7 高3.8

M2330-2



### 30-3 古銅連山形筆架

江戸末～明治時代 19世紀

銅鑄造

幅16.3 奥行2.3 高6.2

M2330-2



### 30-4 古銅虎文鎮

江戸末～明治時代 19世紀

銅鑄造

幅9.0 奥行4.9 高2.3

M2330-3



31 染付摩訶般若波羅蜜多心經陶硯

青山禮三 (1919-)

1977 (昭和52) 年(草の頭窯)

染付磁器

縦16.8 横12.5 総高5.0 身高3.7

M2346

青山禮三は、1953 (昭和28) 年作陶の道に入り、1966 (昭和41) 年岐阜県多治見市小名田に息子双溪と草の頭窯を開いた。禮三は、長年にわたり染付磁器に取り組んでおり美濃古染付と称し、繊細な祥瑞風の絵模様と呉須の優しい青みが特徴である。さらに、十牛図、碧巖録、鳥獸戯画を描くなど深い精神性をうかがわせる作品が多く知られており、この作品の蓋表にも整然と落ち着いた筆致で経文が書き込まれている。定三は禮三の工房を訪ねるなど親交があり、双溪の記憶によれば、この作品は丸榮の個展の際に定三が購入したものである。1998 (平成10) 年多治見市無形文化財保持者 (染付) に認定された。(仲野)

桐箱に納められる。

桐箱蓋表：摩訶般若波羅密陀經/陶硯/草の頭窯/青山禮三」墨書 白文長方印「禮」

箱蓋裏：「奉寫/昭和五十式年丁巳年九月白露/草の頭窯 青山禮三」墨書 朱文方印「草」

蓋覆：「般若波羅密陀經/陶硯」木村定三墨書

風呂敷に木村定三が「青山禮三/般若波羅密陀/心經/陶硯」と墨書きする。(編者)

## 謝辞

硯の第1回目の調査は2005（平成18）年に故北畠双耳氏に御協力頂いた。但しこの時の調査は写真のみの調査で終了し、その後、双耳氏が逝去された。

2014（平成26）年、弟の北畠五鼎氏が悉皆調査を引き受けて下さり、今回、木村定三コレクション「硯目録」を完成することができた。心より御礼申し上げたい。また北畠双耳氏の御冥福を心よりお祈り申し上げる。

## 凡例

・本目録は、愛知県美術館所蔵「木村定三コレクション」の中から、硯とその付属品の一部を掲載し、解説を付したものである。

・各作品名は、各作品の調査者の見解を勘案して決定した。

・各作品のデータは、掲載番号、作品名、製作年代、素材技法、寸法（cm）、コレクション番号の順に記載した。

・掲載の順は、中国、朝鮮半島、日本と製作地に分け、時代順とした。ただし現状不明のものは末尾にまとめた。

付属品の枝番は、硯に近いものから順に付けた

例) No.26-1	葫蘆硯	…硯
No.26-2	水滴	…付属品
No.26-3	鉈に椿蔞絵螺鈿硯箱	…硯箱

・硯の部位として、墨を磨る部分を墨堂（田、陸と称する場合もある）、墨を貯める部分を墨池（海と称する場合もある）と称す。

・箱書き等、判読できなかった文字を\*とする。

・本目録は、下記の調査者が分担執筆し、各文末に下記の略称に従って記した。また、すでに『朝鮮陶磁』に掲載されたM2351《瓜鉄硯》については、片山まび氏の了解を得て同氏の作品解説を再掲した。

北畠 五鼎（北畠）  
小池 富雄（小池）  
仲野 泰裕（仲野）  
森 達也（森）

・木村定三コレクション「硯」の調査は、愛知県美術館・古田浩俊、長屋菜津子が引継を行いながら担当し、その間、加藤里英、足立好弘の調査補助を受けた。

編集 愛知県美術館 長屋菜津子